

Katherine Mansfield の短篇小説(Ⅱ)

—“The Garden-Party” について—

久 田 竹 一

三十四才の若さでこの世を去った Katherine Mansfield (1888—1923) は、*In a German Pension* (1911) , *Bliss and Other Stories* (1920) , *The Garden-Party and Other Stories* (1922) , *The Dove's Nest and Other Stories* (1923) , *Something Childish and Other Stories* (1924) に収められている八十九篇の短篇小説を書きのこしている。ここ数年彼女の文学に心ひかれてきた私は、今から二年程前、「Katherine Mansfield の短篇小説」と題する拙ない小論文を書いたことがあるが、そこでは彼女の有名な諸短篇を扱うのをことさら避けて、“Her First Ball”, “Miss Brill”, “The Stranger” の三篇を取りあげ、それらを私なりに吟味したのであった。しかし、彼女がイギリス文学史上に一つの確固たる地位を占めるに至ったのは、やはり、“The Garden-Party”, “The Daughters of the Late Colonel”, “Bliss”, “The Doll's House” などの傑作を書いたが故なのであるから、こうした彼女の代表作を素通りして、他の作品のみを論ずるということは、彼女の文学を公正に扱うことにはならないであろう。そして、今私は、作者の最もすぐれた作品を論ずることこそ、その文学を愛する者の果すべき仕事なのであると考えている。だから、ここでは、Katherine Mansfield の作品中最も有名で、イギリスの短篇小説中最もすぐれたものの一つである、“The Garden-Party” を取りあげ、紙数の許す限り、私流に解釈し、鑑賞してみたいと思うのである。

New Zealand 大学の英文科教授である Ian A. Gordon は、

Her range is even more restricted than Jane Austen's few families in a country village. For her, one family and a few relationships she had known were enough to express a universality of experience.⁽¹⁾

と書き、Sylvia Berkman はそのすぐれた著書 *Katherine Mansfield: A Critical Study* のなかで、

In the gallery of characters she has created, a number are merely variations on a few established types (but in the main they are sprightly variations).⁽²⁾

と述べているが、私もこれらの意見に賛成である。確かに彼女の文学の世界は狭く、その登場人物は多様性に欠けている。しかし、彼女の作品に登場する祖母、父親、母親、子供たち、親類縁者や召使、隣近所の人々、あるいは夫と妻、一人暮らしの女性などは、いかに適確に生き生きと描かれていることだろう。そして、単純な物語の背後に、いかに深い人生の真実が示されていることだろう。

“The Garden-Party” においても事情は同様である。ここではまず最初に、三人の姉妹 (Meg, Jose, Laura) と母親 (Mrs. Sheridan) が読者に紹介されるが、あまり目立つような行動をしない Meg は、朝食前に髪を洗って緑色のターバンをいつまでも頭に巻きつけており、Jose はおめかしやで実際的で、召使たちを使うのが上手であり、若い頃の作者の姿を思わせる Laura は、「芸術的」(“artistic”) だが、子供らしいところもまだ残っていて、バターつきパンを手にしたまま庭へ飛び出して行くのである。Sheridan 夫人は、今年の園遊会の準備は全部子供たちに任せたと口ではいっているけれども、前日花屋にたくさんのカンナユリを注文し、料理女にはお客に出すサンドイッチの用意をさせ、おまけに、Laura の友達が園遊会にかぶってくる帽子のことまで指図している。彼女は実際的で手際がよく、家庭内では、時折へまをやるがおおらかな夫を尻に敷いているふしさもある。そして彼女は、Laura にぴったり似合う新しい帽子を最初は自分でかぶろうとしていたのだ

から、派手好きでおしゃれなのだろう。ここまで書けば、Jose が母親の性質をそっくり受けついでいることが明瞭になる。Laura はこの二人とは対照的な存在として描かれており、この短篇小説は、感じやすい思春期の少女 Laura の成長・開眼をテーマとしているのである。

大天幕を張りにやってきた人夫たちが 道具袋をさげて物々しい恰好で立っているのをみると、Laura は手にパンを持った自分の姿を急に意識して赤面するが、努めて厳しい表情をつくろい、母親の口調を真似てあいさつする。

But that sounded so fearfully affected that she was ashamed,
and stammered like a little girl, ...⁽³⁾

自分よりずっと年上の母親の態度で人夫たちに接しようとしながら、そのきざっぽさを鋭く感じ取り、たちまち、自分より年下の女の子みたいに口ごもる Laura の揺れ動く気持が巧みに描かれている個所であるが、彼女はやがて素朴な人夫たちに好意を抱くようになる。これまで直接的な交渉を一度も持たなかったことのない労働者と今はじめて会った Laura は、彼らが意外に優しい連中で、ラベンダーの小枝の匂いをかくような素敵な振舞いをするのを知って、労働者（階級）に対する認識を改め、彼女と一緒に踊ったり、日曜日の夕食を共にしたりする豊かな家庭に育った若者より彼らの方が好ましいと思う。なお、ここで注意しなければならないのは、繊細鋭敏な Laura にとって、階級意識が貧しい人々に対する優越感にはならず、富める者のひけ目となっている事実である。彼女のこういう心の傾きを、作者はこの短篇のはじめの方でそれとなく示している。即ち、人夫の一人から、「楽団もくるんですかい？」といわれたとき、彼女は遠慮勝ちに、「ほんの、とっても小さな楽団なんですよ」といい、たぶん、楽団がちっちゃなものなら、この人だってあんまり気にはしないだろう、と考えるのである。

富裕な人々と貧しい人たちを差別し、後者を不当にいやしめる世間一般の風潮を、「全くばかげた階級制度」(“these absurd class distinctions”)、
「愚かな因習」(“stupid conventions”) と批判する Laura が、彼女の

屋敷の近くに住む荷馬車の御者が事故死したのを聞いたとき、早速園遊会の中
止を考えるのは当然であろう。しかし、実際的な Jose には Laura の気持ちが
理解できない。それは Jose にとって、「とっぴなこと」(“extravagant”)
なのである。Laura が、

“And just think of what the band would sound like to that
poor woman.”⁽⁴⁾

というと、Jose は本気に怒り出し、

“If you're going to stop a band playing every time some one
has an accident, you'll lead a very strenuous life.... You won't
bring a drunken workman back to life by being sentimental.”⁽⁵⁾

ときめつける。すでに述べたように、園遊会に楽団をよぶことすらすこしばかり
やましく感じている Laura は、その楽団の華やかな演奏が、突然夫に先立
たれ、五人の幼な子を抱えて悲嘆に沈んでいる未亡人に、どんなに辛く聞える
ことだろうと優しい心づかいを示しているのだが、Jose にはそんな妹の態度
が歯がゆくてならない。Laura が荷馬車の御者を隣人として考えているのに
対し、Jose は彼を自分たちとは無関係な人間の一人 (“some one”) とみ
なし、そう推測するなんの根拠もないのに、彼を酔っぱらっていたときめてし
まっている。Jose は、荷馬車ひきの貧しい労働者ならのんだくれにきまっ
ている、という自分たち上流階級のものみかたに従っているのである。しか
し、Laura をセンチメンタルだという彼女の批評は当ってはいなくもない。
Laura は、彼らと僅かな時間接触しただけなのに、人夫たち(というよりは、
労働者一般)に対して、簡単に共感や好意を持ってしまい、荷馬車の御者が急
死したと聞けば、すぐに園遊会を中止しなければならぬと考える。こうした
彼女の態度決定は、一応正しい方向に沿ってはいるのだけれども、あまりにも
気分的感情的で、一人よがり、センチメンタルだともいえるからである。

さて、姉といい争った後、Laura は、園遊会を開くかどうかについて
Sheridan 夫人の見解を求めるが、彼女がおどろいたことには(読者にとって

は、当然の反応と受けとられるのだが）、貧しい人々を冷たく見下している母親は（彼女は、「あの人たちがあんな狭苦しいみじめな家でどうして生きて行かれるのか私には不思議でならないのよ」という）、Jose と全く同様の意見をいい、理性では母親の理屈を認めながらも感情的には承服できないでいる Laura を、新しい帽子で箝絡してしまふ。作者は、Laura のセンチメンタルだが暖い人間的な振舞いと、Sheridan 夫人と Jose の現実的だが冷たいエゴセントリックな言動を鮮かに対照させて、読者をすっかり Laura の側にひきつけてしまふのである。

ところで、「対照」(“contrast”) といえば、“The Garden-Party” は多くのものが対照的になっているのに気づく。この短篇小説の構造は、全篇のほぼ真中に出てくる、“Something had happened.” という一文によって前後に分けられているが、前半の雰囲気あるいは色調はあくまでも明かるく華やかであり、後半のそれとは対照的になっている。大天幕を張りにきた人夫たちの姿は善意に溢れる Laura の視点から眺められ、彼らの好ましい面だけが強調されていて、貧しさやみじめさにはすこしも言及されていない。家中の者が園遊会の準備に熱中し、楽しい期待に胸はずませている Laura が軽やかに動きまわっている。窓から吹き込む微風は追っかけっこをし、インキびんのふたと銀の額ぶちの上には、二つの小さな陽の光が反射してたわむれているよう。

Darling little spots. Especially the one on the inkpot lid. It was quite warm. A warm little silver star. She could have kissed it.⁽⁶⁾

こうした鮮かな快いイメージに接すれば、読者も Laura と同じように浮き浮きした気持ちになってしまう。ポーチにはピンクのカンナユリがいっぱい並び、“This Life is Weary” という歌の予行演習をする Jose の顔は、悲しい歌の文句とはひどく不似合いな晴やかな微笑を浮かべている。料理女は十五種のサンドイッチを作り、Laura は小旗にそれらの名前を書き込み、Godber

の店の者がクリーム・パフェをとどけにくる。しかし、御者の事故死を知らせるのも彼であって、ここから明一色の世界に暗い影がさしてくる。

作者は園遊会を中止するかどうかの問題で Jose と Laura を争わせた後で、次のように書いている。

That really was extravagant, for the little cottages were in a lane to themselves at the very bottom of a steep rise that led up to the house. A broad road ran between. True, they were far too near. They were the greatest possible eyesore, and they had no right to be in that neighbourhood at all. They were little mean dwellings painted a chocolate brown. In the garden patches there was nothing but cabbage stalks, sick hens and tomato cans. The very smoke coming out of their chimneys was poverty-stricken. Little rags and shreds of smoke, so unlike the great silvery plumes that uncurled from the Sheridans' chimneys. Washerwoman lived in the lane and sweeps and a cobbler, and a man whose house-front was studded all over with minute bird-cages. Children swarmed.⁽⁷⁾

ここにはなんという対照の妙があることだろう！ 一本の広い道路で二つに分けられている貧富の世界。急な坂の上には Sheridan 家の大きな邸があり、坂のどん底の小路にはちっぽけな小屋がひとかたまりになっている。焦茶色のペンキを塗られたみじめたらしい小屋は邸のすぐ近くにあるだけに、富裕な Sheridan 家の人々にとっては、「この上なく目ざわりになるもの」なのだ。そして、葉の部分は食べつくされて茎だけになったキャベツと、病気のため卵を生まなくなった雌鶏と、空になったトマトの籠があるだけのごく小さな彼らの庭は、この短篇の冒頭に豊かさや明るさそのものとして描き出されている Sheridan 家の広大な庭園と対照させられている。その庭園では、庭師が日の出と共に働き出し、芝生はきれいに刈られ、バラの花形に作られた花壇は輝く

ばかり。何百というバラが一夜にして花開いて、「緑色のバラの木々は、まるで大天使の訪れを受けたかのように頭を垂れていた」(“the green bushes bowed down as though they had been visited by archangels.”) のである。さらに作者は煙の描写のなかにも二つの階級の相違を見事に捕えているのであって、貧しい家々の煙突からは、「ちっぽけなボロ切れや端切れのような煙」が吐き出され、Sheridan 家の煙突からは、「大きな銀色の羽毛のような煙」が立ち昇る、と書かれている。

母親にかぶせてもらった素敵な帽子 (“her black hat trimmed with gold daisies, and a long black velvet ribbon”) の魅力に負けて、Laura は園遊会を中止したいという自分の気持を多分とっぴなんだろうと考え直すが、その彼女の脳裏を、五人の幼な子を抱えた哀れな未亡人が待つ家のなかへ御者の遺骸が運び込まれつつある光景が一瞬よぎるのである。Sheridan 家の他の人々はいざ知らず、死の暗い影は Laura の心のなかに留まり続けているのだ。だから彼女は、彼女に似た性情を持った兄の Laurie (彼のなかに、その突然の死が Katherine Mansfield に創作上の一転機を与えた彼女の弟 Leslie の面影をみる評者もある) が帰宅したとき、再び例の事故を思い出すのである。

この作品のテーマは前に述べたように Laura の成長・開眼にあるので、園遊会そのものの描写はごく短くなっている (Constable 版で29行)。その部分の雰囲気あるいは色調は、当然のことながら、この短篇の前半のそれと同じである。だが作者は、さりげなく次のような一文も書き加えている。

They were like bright birds that had alighted in the Sheridans' garden for this one afternoon, on their way to —where?⁽⁸⁾

ここでは、装いをこらし、軽やかに歩き、晴やかな話し声や笑い声を挙げているお客たちの様子が、「色どり鮮かな鳥たち」という適切なイメージで表現されているけれども、彼らは Sheridan 家の庭から飛び立ってどこへ向うのだろう。Laura もまたその鳥たちのなかの一羽ではないだろうか。

やがて、「申し分のない午後がゆっくりと熟し、ゆっくりと色あせ、ゆっくりとその花びらを閉じた」(“the perfect afternoon slowly ripened, slowly faded, slowly its petals closed.”) 後、御者の事故死を話題にするのは、労働者に同情的で、Laura や Laurie の側に属する Sheridan 氏なのである。Sheridan 夫人は、楽しかった園遊会の直後にそんな話題を持ち出す気の利かない夫にうんざりしながらも、例によってうまいことを考えつき、サンドイッチやお菓子やクリーム・パフェの残り物をその御者の家へ届けるようにという(なんという思い上った態度だろう)。そして、豊かな世界から貧しい世界へ向うのは、いうまでもなく Laura なのである。

It was just growing dusky as Laura shut their garden gates.
A big dog ran by like a shadow. The road gleamed white,
and down below in the hollow the little cottages were in deep
shade.⁽⁹⁾

理想的な好天に恵まれた園遊会の日も、Laura が庭の門を閉めようとする今、「暗く」なりつつある。これまでこの短篇にみなぎっていた陽光は消え失せ、これからは夜の闇が支配的となる。大きな犬が「影のように」走りすぎ、小屋が「深い影のなかに」包まれており、広い道路だけが白く光っている。園遊会の快い興奮からさめ切っていなかった Laura の気持も、彼女がその道路を横切り、「煙っぽく、暗い」(“smoky and dark”) 小路に入ると、いつしか沈み込んでしまう。何故なら、ここはもはや死の国だからである。Daniel A. Weiss は、Sheridan 家の庭は死を含まぬ生の世界であり、小屋のかたまりは生とは無縁の死の世界であるという。Laura はカンナユリを持たず(花は地上に咲くものであり、地下に花はない)、Cerberus (地獄の入口を守る三つ頭の犬) の傍を通りすぎ、川のように二つの世界を分けている「白く光る」道路を越えて、Avernus (地獄) へ降りて行くのだという。⁽¹⁰⁾

やがて、荷馬車の御者の家を探し当てた Laura は、「煤けたランプに照らされた、みじめたらしい、小さな低い台所」(“a wretched little low

kitchen lighted by a smoky lamp”) で未亡人に会う。「彼女の顔はふくれあがって赤く、目も唇も腫れあがって、恐ろしげにみえた」(“Her face, puffed up, red, with swollen eyes and swollen lips, looked terrible.”) ので、Laura は バスケットを置いてすぐ帰ろうとするが、同じように泣き腫らした顔をした未亡人の姉に導かれて、死者と対面する。「絵にかいたように美しい顔をした彼」(“’e looks a picture.”) が深々と眠ってそこに横たわっているのをみたとき、Laura の interior monologue は次のようである。

Oh, so remote, so peaceful. He was dreaming. Never wake him up agin... What did garden-parties and baskets and lace frocks matter to him? He was far from all those things. He was wonderful, beautiful. While they were laughing and while the band was playing, this marvel had come to the lane.⁽¹⁾

園遊会によってあらわされる人生の豊かで華やかな面と、貧しい御者の不幸な事故死によって示される人生の暗い面を一日のうちに経験した Laura は、今その若者の傍にあって、死あるいは死者は醜く恐ろしいものであるという通念を破られ、死が美しく、清らかで、安らかなものでもありうることを知ったのである。ここに彼女のもう一つの開眼がなされたのであるが、作者はなんと巧みに生者の醜さと死者の美しさを対照させていることだろう。

最後に、この作品に出てくる「帽子」(“hats”) について述べてみたい。

Hats are used functionally in the plot and acquire symbolic value within the framework of the story as they come to represent the whole social milieu of the Sheridan class with its leisure, its conspicuous consumption, and its caste distinctions.⁽²⁾

とは、Warren S. Walker の妥当な見解であるが、“The Garden-Party” を注意深く通読する者なら誰でも、そのなかで作者が帽子についてしばしば触れていることに気づくであろう。朝の庭に出ていた Laura に電話がかかって

きたとき、玄関では彼女の父と Laurie が会社へ行く用意をして、「彼らの帽子にブラシをかけているところ」(“brushing their hats”)であり、向うの電話口にいる Kitty Maitland に対して、「先週の日曜日に彼女がかぶっていたあのかわいらしい帽子」(“that sweet hat she had on last Sunday”)を園遊会にかぶってくるように告げてくれと、Sheridan 夫人は Laura にいう。前にも述べたように、御者の死に動てんした Laura の注意をその悲劇からそらせたのは、富裕な階級を代表する母親によって与えられた立派な帽子なのである。Laura が不幸な一家のことをチラと思い浮かべるのは彼女が心にやましさを感じていることを示しているけれども、「そうしたすべが新聞にのった写真のように、ぼやけて、非現実的にみえた」(“it all seemed blurred, unreal, like a picture in the newspaper.”)のは、彼女が帽子の魔力・魅力に屈してしまったことを意味しているといっていだらう。彼女はこのとき、御者の死を他人事として、新聞の社会面に写真入りでのる一事件として受け取ろうとしているのである。園遊会をどうするかについて兄の意見を求めようとした Laura は、彼からも帽子を賞められて出鼻をくじかれ、彼女の最後の抵抗もあえなくついでてしまう。彼女は園遊会の間中母親に代わってホステスの役目を果すのであるが、お客たちが彼女の帽子を賞賛するのは意味深い。会の後、貧しい人々の小屋の間を通り抜けて行きながら、人目を引く「大きな帽子」(“the big hat”)をかぶってきたことを後悔している Laura は、死者に別れを告げるとき、「あたしの帽子を許してくださいね」(“Forgive my hat.”)という。優しい Laura は、死という人生における最も厳粛な事実について新たな認識を得た今、帽子の魔力・魅力から解き放たれて、貧しい階級の一員だった死者に向って、富裕な階級全体に代わり、心からのおわびをいっているのであらう。そして、私は急いで一言つけ加えたいのであるが、帽子に関してまた、作者は巧みな対照法を用いているのである。この短篇小説の冒頭に登場する労働者は、「麦わら帽子」(“his straw hat”)をかぶっており、夜になって Laura が暗い小路を急いで行く

とき、貧しい人々は「ツイードの鳥打帽」(“tweed caps”)をかぶっている。麦わら帽や鳥打帽はここでは労働者階級の帽子なのである。

【註】

- (1) Ian A. Gordon: *Katherine Mansfield*, London, Longmans, Green & Co., 1955, P. 19
- (2) Sylvia Berkman: *Katherine Mansfield; A Critical Study*, New Haven, Yale University Press, 1951, P. 202
- (3) Katherine Mansfield: *The Garden-Party and Other Stories*, London, Constable, 1922, PP. 69—70
- (4), (5) *ibid.* P. 82
- (6) *ibid.* P. 74
- (7) *ibid.* P. 81
- (8) *ibid.* P. 85
- (9) *ibid.* P. 88
- (10) Daniel A. Weiss: “The Garden Party of Proserpina”, *Modern Fiction Studies* Vol. 4 No. 4, PP. 363—4

(ここで「庭」について一言すれば、それは楽園としてのエデンの園以来豊かな文学的の広がりをも有しているのであって、西欧には庭園文学とでも呼ぶべきものが多く創られてきている。そのなかでは、「庭」の平和と秩序と実りを賛える Andrew Marvell の “The Garden” は最も典型的なものであり、さらに John Donne の “Twickenham Garden”, John Milton の *Paradise Lost*, また T. S. Eliot のバラ園などがあり、散文では、Lewiss Carroll の *Allice in Wonderland*, Graham Greene の “Under the Garden” など枚挙にいとまがないのであるが、“The Garden-Party” もその系列に属する一佳品といえよう。)

- (11) *The Garden-Party and Other Stories*, PP. 91—2

- (12) Warren S. Walker : "The Unresolved Conflict in 'Garden Party,'" *Modern Fiction Studies* Vol. 3 No. 4, P. 356
-

〔文 献 紹 介〕

最近わが国で発表された Katherine Mansfield 関係の論文には、次のものがある。

- マンスフィールドの『風が吹く』 塚本利明 (CALIBAN, 第3号)
- キャサリン・マンスフィールドのニュージーランドを舞台とする三篇について 加藤富貴子 (神戸女子短期大学学会・論攷, 第11巻第1冊)
- キャサリン・マンスフィールドのロンドンを舞台とする三篇について 加藤富貴子 (神戸女子短期大学学会・論攷, 第13巻第1冊)
- キャサリン・マンスフィールドとニュージーランド (I) 宗恵子 (関東学院大学・短大論叢, 第27集)
- キャサリン・マンスフィールドとニュージーランド (II) 宗恵子 (関東学院大学・短大論叢, 第29集)
- Katherine Mansfield の文体——ガラスのように透明な文体の分析—— 中川ゆきこ (視界, 第7号)
- 「描出話法」と「描出話法的文体」 中川ゆきこ (視界, 第8号)
- キャサリン・マンスフィールドの小説——その“生”への渇きについて—— 大社淑子 (早稲田大学・英文学, 第28号)
- キャサリン・マンスフィールドの「蠅」について 金子貞雄 (弘前大学教養部・文化紀要, 第1号)
- Katherine Mansfield の世界 黒川樟枝 (川村短期大学・英語英文学紀要, 第3号)